

「家父長的なケア領域」とその「外部」

——ヘッベルの『マリア・マグダレーネ』

菅 利恵

はじめに 家父長制と「もうひとつの声」

「ケアの倫理 Ethics of care」の出発点となったキャロル・ギリガン Carol Gilligan の『もうひとつの声で』(In a Different Voice, 1982) は、なにかを選び判断するときのふたつの姿勢に注目している⁽¹⁾。ひとつが、まわりの事情に左右されずに原理をつらぬく自律的な姿勢である。もうひとつは抽象化された理屈よりもさまざまな関係性に配慮する姿勢で、その場合、関係性から生まれるニーズや不安に耳をすませながら事態に向き合うことが重んじられる。前者は経済や政治の領域で大人としてふるまうときに求められる態度であり、後者は親密な人間関係や育児や介護など、もっぱら家族をはじめとする私的な領域でつちかわれてきた。

決断力が男らしさの基本とされ、曖昧さが女性につきもののイメージとされてきたように、往々にして右のふたつはジェンダー化のうえで序列化されてきた。つまり自己を堂々とつらぬく前者が男性的かつ成熟した態度として評価されるのに対して、後者は女性的で未熟な弱い姿勢ともみなされ、公的領域にはそぐわないからと周縁化されがちだったのだ。ギリガンの「ケアの倫理」は、こうした評価の偏りを批判し、後者の意義にこそ光を当てるものである。人の生を支える相互依存の網を表舞台に押し上げることを目指し、この網に配慮した語りや選択に公的な認知を与えようとする彼女の主張は、発表されて四〇年以上を経た今もなおアクチュアルだろう。経済合理性の論理が幅をきかせる現代にあって、生と切り離せない非効率的なつながりへのニーズに焦点を当てたその主張の重みは、むしろ増してもいる。⁽²⁾

ただ、疑問もある。ギリガンは『抵抗への参加』(Joining the resistance, 2011)において、旧来の序列化と分断のメカニズムに「家父長制」の観念をあて、「ケアの倫理」がこれに「抵抗」する立場であることを明確にした。⁽³⁾「男性」の優位と父権的家族制度を特徴とするこの体制は、彼女によると、誰しもが持つ「つながりのなかで生きたい」という願いを矮小化する力にほかならず、だからそれは「人間の本性」とは「固有の緊張関係」にあるという。⁽³⁾たしかに家父長制にともなう権威構造や切り捨てのシステムは、「ケアの倫理」とは相容れないものだろう。とはいえ両者をそれほど綺麗に切り離すことはできるのだろうか。ギリガン自身問題化しているように、ケアの営みそれ自体も家父長制の枠組みのなかで展開してきた。家父長制が「ケアの倫理」を抑圧する、という論理構成をとると、あたかも家父長制がケア領域の「外部」にあるかのように見えてしまい、両者の絡み合いやそれぞれの論理の交錯を、把握しにくくなるように思われる。また、これはギリガンが心理的なメカニズムを問題にしているので仕方ないことでもあるのだが、家父長的なものの形態の変化や、ケア領域に働く他の社会的な力も見えなくなってしまう。

おそらく家父長制とケアの対立を際立たせることは、両者が絡まり合う現状を乗り越えるためにこそ必要なのだら

う。結局は、家父長的なジェンダー秩序や固定的な権威構造をケアの領域からうまく取りのぞき、これをより柔軟な秩序生成の場に変えてゆくことが求められているのだ。ただ、それが一筋縄ではないかない現状を鑑みても、まずは両者が同じ地平で作用し浸透し合う「家父長的なケア領域」について、その歴史的な文脈に立ち戻って検討する必要があるのではないだろうか。

本稿は、一九世紀半ばにフリードリヒ・ヘッベル Friedrich Hebbel (1813-1866) が書いた市民悲劇『マリア・マグダレーネ』(Maria Magdalene. Ein bürgerliches Trauerspiel in drei Akten, 1844) を、「家父長的なケア領域」崩壊の悲劇として読みとくものである。一八世紀後半に流行した家庭劇のジャンルをあえて一九世紀半ばに蘇らせたこの作品には、ひとつの家族の没落が描かれている。この家族は、つながりへの配慮というケアの姿勢が家長にもある程度認められ、ケアする者も家父長的な秩序意識を共有する、まさに「家父長的なケア領域」だ。独特の排他性をともないつつそれなりに機能していたこの領域が、急速な社会変動に直面して瓦解し、その内なる矛盾を無惨にさらけ出すさまがここには描かれている。本稿ではこの描写を検討し、さらにヘッベルについて残された伝記的なエピソードにも目を向けながら、家父長的なものとケア領域の依存関係、また前者からの後者の解放の可能性について考えてみたい。

一 時代背景——脅威としての自由化

『もうひとつの声で』ではふたつの対照的な姿勢、つまり関係性を大事にする姿勢と原理原則をつらぬく自律的な姿勢が、それぞれ少女と少年にふりわけられている。しかし『マリア・マグダレーネ』ではその違いは性別というよりも

世代の問題だ。一方に、つながりを重んじる古い家長時代をひきずった父親世代がいて、他方に、新しい時流をうまく乗りこなそうとする若い息子世代がいる。前者と後者の対比を具体的に見る前に、少し遠回りになるけれども、まずは父親世代と息子世代を分断することになった歴史の流れを確認しておきたい。

一九世紀ドイツ語圏の歴史を描き出した大部の著、ニッパーダイ Thomas Nipperdey の『ドイツ史』(Deutsche Geschichte 1800-1866, 2013) は、ナポレオン戦争がもたらした「大変動」から話を始めている⁽⁶⁾。一八世紀末から一八一〇年代まで続いたこの戦争を挟んで、中世以来の神聖ローマ帝国の枠組みに終止符が打たれ、近代的な国民国家に向けて大きな一歩が踏み出された。民が貴族や有力者に従属し、土地に結びつけられて賦役や生産活動を行う封建的な体制から、それぞれが自由な主体として活動する時代へと、政府主導による駆け足の「自由化」が始まったのである。この時期の「自由化」は、国家の維持形成に能動的にたずさわる主体的な市民の理念にもつながっていたが、それだけでなく、なによりも「自由な経済活動」を力強く後押しするものだった。重要なのは、誰もが「自由な経済活動」なかで自らの場所をしめ、力の及ぶかぎりその場所を満たす⁽⁷⁾ことを求めるこの「自由化」が、苛烈な競争社会の始まりを意味していたことである。ニッパーダイはこう書いている。

この自由には競争が付随しており、具体的には、競争を制限しているあらゆるものが除去されるはずなのであった。自由な競争こそ、個人を最大の業績を挙げるように鼓舞し、同時に全体にとつての最大の利益を生み出すための手段であり条件である、とみなされた⁽⁸⁾。

経済的な自由化の中身は具体的には、農民の解放、居住地選択や職業選択の自由、土地流通の自由、そして一八一〇

年の営業勅令である。営業勅令とは手工業の分野で「営業の自由」を認め、従来必要とされた能力証明やツンフトへの加入要件なしで手工業経営に参入できる道を開くものである。

個々人が自由な競争主体になることは生活の流動化を意味しており、必然的に、先の見通しがつかない不安が広がることになった。その詳細についてニッパダイは、複数の階層に注目して記述しているが、指物師親方の家庭を描いた作品を読むために大事なのは特に手工業者層をめぐる箇所だろう。それによると、もともと手工業者は同業組合のツンフトに受け継がれる独特の道徳的な慣習や伝統を守り、これに由来する名誉心や誇りをアイデンティティとして、部外者を締め出しながら営業のあり方をコントロールしていた。だが「営業の自由」はツンフトからこのコントロールの権利を奪い、またツンフトの構成員たる親方が徒弟を養成しその職業的能力を管理する権利をも奪うことになる。手工業の分野や地域によりその実情はさまざまだったが、全体として、ツンフトは自律性や独占権を国家に制限され、かつての文化的、政治的権威を失ってゆく。新たな時代の流れは手工業者層にとって、伝統にもとづくアイデンティティや生活の見通しをゆさぶる、深刻な脅威でもあったのだ。

一連の自由化の時代は、大衆貧困の時代とも言われる。人口が増える一方で、いろいろな改革もすぐに成果を生むわけではなく、生活に困窮する層が広がった。「解放」された農民の多くは自活できず、「営業の自由」は手工業者層の零落をうながしたので、暮らしが立ち行かない人々が巷に溢れて社会問題となる。『マリア・マグダレーネ』が発表された一八四〇年代半ばには、大規模な飢饉もあつて各地で暴動が起こっていた。

二 『マリア・マグダレーネ』誕生までのフリードリヒ・ヘッベル

そんなふうには社会のひずみが誰の目にも明らかになった時代を、フリードリヒ・ヘッベルはどのように生きたのだろうか。もう少し、遠回りを続けよう。^⑩

ヘッベルは一八一三年、北ドイツの小さな村で石工の息子として生まれている。もともと貧しい階層だが、父親はさらに零落して家を失い、一家は集落の最下層にまで転がり落ちる。その父親が早くに亡くなったあと、一四歳のヘッベルは教区長の使い走りや書記をして暮らすことになった。階段下の小さな部屋を他の使用人と分け合って眠る貧しい暮らしだったが、この教区長の館には図書室があり、そこで彼は多くの本を読むことができた。やがて仕事用の書き物机で詩を作りはじめる。雑誌に投稿された彼の詩に、その雑誌の編集をしていたアマリーエ・シヨッペ Amalie Schoppe (1791-1886) というハンブルクの作家が目をとめ、支援を名乗り出てくれた。その出自から言えば、やがてなにも持たないプロレタリアートとして世の荒波に投げ込まれていただろうヘッベルの前に、こうして突如として大学に行く道が開かれることになった。彼はこのチャンスを生かすべく、教養と文芸の世界で生きる道を探り始める。

その道のりは順風満帆とはいかなかった。慢性的に資金不足の大学時代をへたのち、一八三九年、ほぼ無一文の状態でハンブルクにおもむき作家生活に入る。稼ぎのないヘッベルを支えたのは、九歳年上の恋人エリーゼ・レンジング Elise Lensing (1804-1854) だった。彼女自身資産家だったわけでもなんでもない。ただ少女時代に彼女のことを気にかけて教育を受けさせてくれた人がいて、それでこの時代の庶民の女性としては比較的高い学歴を持ち、家庭教師をした時期もあった。ヘッベルと暮らしはじめてからは、父が残した少しの遺産と、針仕事などの収入で彼を支えていたようである。しかし生活の見通しは不透明だった。一八四〇年、エリーゼとの間に息子マックス Friedrich Maximilian Hebbel

(1840-1843) が誕生。同年発表した戯曲『ユーディット』(Judith, 1840) で劇作家として順調なデビューを飾ったが、収入面が安定したわけではない。一八四二年、ヘッベルは事態を打開するためにコペンハーゲンのデンマーク王のところにおもむく。望んだ教授職は得られなかったが、王から二年間の旅行支援金を獲得。エリーゼと幼いマックスをハンブルクに残して、パリからローマへ、そしてナポリへと続く旅が始まった。

それは多くの知見を彼にもたらした有意義な旅だったが、彼がおちいつていた困難を根本的に解消するものではなかった。ハンブルクにはエリーゼとマックスが待つており、なんとかして成功を持ち帰らないとどうしようもない。故郷を出てからこの外遊時代にいたるまで、自分の才能で食べていくことを夢見ながらもその見通しは立たず、いつ社会から弾き出されてもおかしくない危機的な状況が続いていた。

先に見たとおり、一八四〇年代初頭の社会状況にあつて、収入の見通しが立たない不安にさいなまれたのは彼だけではなかった。ドイツにかぎらず当時ヨーロッパ各地で広がっていた格差や貧困を、外遊中の彼は行く先々で目の当たりしている。のちに「悲喜劇『Tragikomödie』として発表された『シチリアの悲劇』(Trübspiel in Sizilien, 1847) には献呈の書簡が付されており、そこに一八四五年秋のナポリにおける経験が書かれている。観光客や裕福な市民が集うカフェに座っていた彼は、外から覗き込む「貪欲な、飢えて青ざめたプロレタリアート」たちのまなざしに気づいて慄然としたという。手に届かない幸福をじつと見つめる彼らは、いつか「誰かを冷たく無慈悲に締め殺すに足るほどの、癒しようのない憎しみ」を黙って募らせているように思われた。「所有者階級と非所有者階級を分かち亀裂がどこよりも鮮烈にあらわれた」この場所で、ヘッベルは、「裂け目の多い現在から遅かれ早かれ必ず生まれるだろう未来」をはつきりと予感したという。⁽¹⁾

大量の貧困層の出現や生活の不安定化は政治運動の高まりをうながし、市民的な自由化の波と連動しながら労働者運

動も拡大しつつあった。だがヘッベルはそうした動きには参入していない。彼にとつて同時代の社会問題は、「一方の党派が持つ信念と他方のそれとの戦いではなくただ利害に関する争い」であつた。⁽¹²⁾ 変動期にうまく立ち回つて肥え太つた者と、不利な側に押しやられた者との分断、またそこから生まれる憎悪は、彼にとつてはなによりも、人間そのものに巢食うエゴの問題だつたのだ。利害がぶつかるところに立ちあらわれる、互いに傷つけ合い、足を引っ張り合うような救いのない人間模様を、文学的形象にすくいあげて容赦なく拡大してみせること。これが、「裂け目の多い現在」に對する彼なりの応答だつた。そのかっこうの媒体とされたのが、夫婦や親子といった私的で親密な人間関係である。

パリにいた一八四三年に、彼はつらい知らせを受け取る。幼いマックスが亡くなつたのだ。エリーゼは二番目の子どもをみごもつており、ヘッベルは喪失にさいなまれながらも金の工面を考えねばならなかつた。問題は金だけではない。エリーゼとの仲それ自体も行き詰まりを迎えつつあつた。そのてんまつには本稿の最後であらためて目を向けよう。

仕事でも私生活でも先が見えなかつた困難な時期に、ヘッベルは、父親が娘を理不尽なまでにさいなむ不穏な悲劇を書き上げた。それが市民悲劇『マリア・マグダレーネ』である。自分のものであり、また時代のものであつた息苦しさ、そこでは陰惨な家庭崩壊のドラマを通して赤裸々に炙り出されている。以下ではその詳細を、父と娘それぞれの側から追うことにしたい。

三 父親アントンにみる戦略としての配慮

三一

指物師親方のアントンには病氣から回復したばかりの妻がおり、すでに成長した息子と娘がいる。息子のカールは遊び歩くことが好きで、昔気質の父とは折り合いが悪い。クララは親の言うことをよく聞く少女だが、じつはひそかに深刻な問題を抱えていた。恋人レオンハルトに関係を迫られ、ことわりきれずに彼と寝てしまったのである。第一幕では、しばらく顔を見せなかったレオンハルトが、クララの家にやってくる。就職が決まったからと、アントン親方にクララとの結婚の許可をもらいにきたのだ。そうして世代も考え方まったく違う二人の会話が始まる。

「勤勉であること、儉約に努めること、実直であること、打ち解けることのない、厳格で幾分権威主義的な誠実さとモラル、時として感傷に陥りやすい家族意識^③」。先に見たニッパードイの本で、手工業者階層に特徴的とされているメントリテイだ。アントン親方はまさにこれを体现した人物として描かれている。生真面目で実直、頑固一徹で融通がきかない。

まず注目したいのは、そんな彼がレオンハルトに語った次のエピソードである。小さい頃にアントンは、父親を亡くして極貧に落ち込んでいたという。母親が糸を紡いで糊口をしのぎ、飢えをごまかしながらなんとかやりすごす、ぎりぎりの生活だった。しかしあるとき、ゲツプハルトという親方がアントンを徒弟にして救ってくれた。やがてアントンは成長して立派な親方になったが、一方恩人の親方の方は見る影もなく零落してしまう。彼が正気を失い、自分で喉を切って死にかけているのをみて、アントンは自分が貯めていた金をひそかに彼に渡し、借金の証文も後から破損させて無効にしたのだという。

杓子定規で儉約家のアントン像からすると、意外なエピソードでもある。彼は恩人のために、貴重な自分の蓄えを投げ出したのだ。少年時代の彼は不器用で役立たずだったというから、ゲップハルト親方の方も、合理的な計算だけで彼の面倒をみたわけではないだろう。つまりここには、権威ある男性たちが、非打算的な献身や自分本位ではない共感に駆られるさまが描かれている。彼らの「名誉 Elite」の意識を支える「幾分権威主義的な誠実さ」も、場合によっては非合理的な献身に転じうることだろう。ギリガンが示した家父長制のイメージとは違い、この家長たちの思考回路は規律一辺倒ではなく、合理性よりもつながりにもとづいた選択にも開かれており、その意味ではケアの倫理とも響き合う部分をたしかに持っている。

もっとも、だからといって彼らが、家庭内のケアをになう女性たちと同じ目線に立っているわけではない。彼らの行為はあくまでも家長どうしの相互扶助の延長にあり、その関係性は、家庭の外で結ばれる男性同士の共犯めいた絆である。アントンが奉公に出たおかげで母親も生きのびることができたように、この相互扶助は家族の生存条件を支えてもいるのだが、そもそも母親が糸紡ぎしかできないのは、男性間の助け合いを軸とした経済活動に彼女が入れてもらえず、生きる糧を得る道をあらかじめ厳しく制限されているからにほかならない。男性同士の絆として構築される相互扶助は、女性を疎外しながら保護の対象にし、それを通してこそ男女のヒエラルヒーを盤石なものにするのだ。

それでも、人は他と支え合わねば生きられないという認識に基づいている点で、家長たちの相互扶助にも、家庭内のケアと響き合うものを認めることは可能である。しばしば感傷に傾くという点でも両者は同じで、涙を忘れたような頑固者のアントンも、妻の病と親方の懐かしい思い出には同じようにその頬を濡らす。アントンはまさに、家父長的なものとケアの精神が渾然一体として混ざり合う、「家父長的なケア領域」の家長なのだ。

重要なのは、アントンのケア精神を示す右のエピソードが、ここではまったく「いい話」や「美談」として機能して

はいない、ということだ。つまりこのエピソードには筋書き上きわめて皮肉な役割が与えられている。すなわちアントンのこの打ち明け話のせいで、打算家のレオンハルトに、クララが持参金を見込めない娘であることが知られてしまった。アントンの意外な人間らしさを伝える昔話は、彼自身の娘に対しては配慮を欠いていたことになる。

つながりに配慮したふるまいや語りが逆に攻撃的な効果を持つというのは、右のエピソードの場合、意図的ではなかった。しかし、そこにはこの父親の独特の攻撃性が予告されてもいるだろう。彼が発する言葉を、少し詳しく見てみよう。

アントンの語りに特徴的なのは、それがしばしば反語的な効果を明らかにねらっていることである。彼は自らの意図とは逆の言葉をわざと使い、とても曖昧で皮肉っぽい話し方をする。教会に来る約束をすっぱかした息子への失望を語るときはこんな調子だ。

まあ俺らのような老いばれは死神さまに感謝せにやらんぞ。まだまだ、おまえさんみたいな若いのにまぎれて、うろつきまわらせてもらえとる。おかげで勉強になるわ。昔は間拔けな世間のやつあこう言ったもんじや、父親つてなあ息子に教えるためにいるつてな。こりゃ逆なんだよ、息子の方が父親に仕上げの磨きをかけるのさ。あわれな単細胞親父が、墓のなかで蛆虫相手に恥いるようなことになりませんように、てな。ありがたいことに、俺にもカールという立派な先生がおる。こいつは遠慮せんからな、この老いばれ餓鬼を甘やかしゃあせん。俺の思い込みつてもんをガンガンに叩きのめしてくれるのさ。⁽¹⁴⁾ (341f.)

ここで彼は、息子が自分との約束を破って腹が立つ、というだけのことをまっすぐに表現せず、かわりに自分がもう時

代遅れの「老いばれ」であることをあえて強調する。それは実際、時代に追い越されそうな彼の危機感のあらわれでもあるのだろう。美談も美談として通用しなくなっている事態が端的に示すように、「家父長的なケア領域」を支えていた誠実さや信頼の美德、またそれにもとづく「誇り」は、人をしきたりから自由にする新たな風潮のもとでもはや意味を失いつつある。そのことをアントンも日々痛感しており、それを若者たちの教会軽視を引き合いに出して語るのだが、その口調もやはり反語的である。

今時の若いもんは俺たち老いばれを追い越しとるよ、信心に場所は関係ねえってんだからな。鳥を捕まえてようが、散歩してようが、それどころか飲み屋でくだをまいてたつて、お祈りはできますってさ。(…)しまいにやありがたいお言葉も自分で自分に言うわけよ、しょせん自分も牧師もおなじ人間さまだからなあ。(342)

彼の血肉となっているモラルが、新しい理屈によって次つぎと梯子を外されている。そのことをよくわかっているからこそ、彼は人や出来事と反語的に向き合い、予防線を張るのだ。彼はレオンハルトに次のように言う。

考える？ おまえさんのことを？ 誰かのことを考える？ 鉋で板をまっすぐ削る、それなら俺もやるけどな、自分の考えで人間を削る、そんなこと俺はやらねえ。そんな馬鹿な真似はもうとつくに卒業したのさ。木の葉っぱが緑になりゃあ、俺もまあ考えるね、花が咲くのももうすぐだ、てな。で、花が咲いたら、まあこりゃ実がなるか、て思う。こういうことで、いっぱい食わされたためしはねえ。だから俺も考えるのはやめねえ。だが人間についてなんにも考えねえさ。悪いことも、良いことも、なあんにもだ。そうすりゃ、心配やら希望やらがはずれていっぱ

い食わされたところで、赤くなったり、青くなったりしなくてすむからなあ。(341)

自らの原理原則で相手を判断するのではなく、判断保留にして状況に身を任せるというのは、ケアの実践で特徴的にあらわれる姿勢でもあるだろう。ここではそれが、誰かとの関係性を維持するための配慮ではなく、あとでいっぱい食わされないための自己防衛に用いられている。この父親は、自分にとって受け入れがたい時代潮流にさらされたとき、あからさまな強さをまとうかわりに、自己放棄的な曖昧さを反語的に演出し、それこそを防衛的な攻撃の手段にするのだ。

こうしてアントンが自らの言葉をいびつに転倒させてしまったのに対して、若い世代のレオンハルトは、異なるかたちで時代の流れに適応する。「家父長的なケア領域」に見られた「ケアの倫理」とも共振する部分、つまり義理堅さや信頼に支えられた相互扶助の精神は、レオンハルトにとって、乗り越えるべき過去の悪癖以外のなものでもない。だから彼にとっては、アントンがやや軽んじながら語ったその母親の涙も、ゲップハルト親方を思っただけの涙も、等しく愚かしいものである。年配世代の「いい話」に彼はつよい拒否反応を示すが、それは持参金のあてが外れたことを苦々しく思ったというだけでなく、そのような非合理的で「馬鹿(342)」なふるまいが、彼にはただもう許せないのだ。彼が信奉しているのは、つながりの維持や関係性への配慮にとらわれた領域の全き「外部」、すなわち新しい競争社会の論理にはかならない。いつ自分が社会の外に押し出されるかわからないという、余裕のない強迫観念にとらわれている点で彼はアントンとまったく同じだが、だからといって彼は、アントンのようにまわりくどい自己防衛のスタイルはとらない。自らの利益のためになんでも利用するというのは、競争の論理を追求する彼にとってむしろ当たり前のことなのだ。だから彼は伝統を一律には否定しない。自らの得になりうるもの、つまり男性優位の構造それ自体は無批判に

受け入れる。というよりも彼が自らの「男らしさ」を確信しているところをみると、彼にとつては、生活をまわすためのシステムでもあった家父長制から余分な（女々しい）ものを取り除き、男性優位の利権システムに磨き上げることこそが「男らしい」のだろう。いずれにしても彼の具体的なふるまひは卑劣としか言いようのないものである。彼は恋人のクララが、幼馴染の秘書と再会して彼に目を奪われたのを見てとると、彼女が自分と別れられなくなるように、体の関係を強要した。また、金庫係としての就職口を別の男性と奪い合う形になると、その試験日に友を使って彼に酒を飲ませ、試験で失敗するよう仕向けてまんまと自分が合格した。さらに父親アントンの言葉から、クララに持参金がないことを確認すると、クララに妊娠の可能性を知っているにもかかわらず、彼女を簡単にすててしまうことになる。

三二

アントンとレオンハルトのやりとりが一段落したあとに、突然家が騒がしくなる。息子のカールに窃盜の嫌疑があるとして、廷吏が踏み込んできたのだ。病み上がりの母親はショックのあまり死んでしまう。レオンハルトは、これは好都合とばかりに、犯罪者の家庭とは関わりを持たないからと言いわけをしてそくさとクララのもとを去る。

あとからわかることだが、じつはカールは潔白で、一家を崩壊させた逮捕劇の遠因はほかならぬ父親アントンにあった。アントンはかねてより廷吏らと敵対していたのである。

その背景には「自由化」の流れがあった。中世以来、廷吏ら刑罰の実務をになう人びとは賤民階層で、市民の相互扶助の輪から締め出され、服装や居酒屋でのふるまい方にいたるまで厳格な制約を受けていた。^① ツンフトを中心として編み上げられたつながりは、差別と排他の力学によってこそ維持されてもいたのだ。「自由化」とともに差別は解かれ、

廷吏らも市民として認められることになったが、アントンはこれを無視して差別行動を続けており、そのために廷吏アダムから深い恨みをかっていたのである。アダムは、商人ヴォルフラムのところで宝石が紛失し、そこに先日カールが机の修理にやってきていた話を聞くと、ろくに調べもせずにかールが犯人だと決めつけた。そしてカールを逮捕すると、いつものように人目を避けて連行するかわりに、町中を引き回してアントン一家の不祥事を晒しものにしたのだった。

事件前にアントンが廷吏に露骨な差別意識をぶつけたのは、古い身分秩序から自由になった彼らが自分と肩を並べようとしたことに、どうしても腹が立ったからである。もはや時代遅れとなったこの秩序は、差別と排他にまみれていたとはいえ、アントンにすればおのれの地位と自意識を支えてくれる、かけがえないものだった。一連の出来事は彼にとって、ただ身内の不幸というだけでなく、常日頃感じていた敵対的な力、つまり自分に生きるための場所を与えてくれた古い秩序を、自分もろとも押し流そうとする「自由化」の荒波が、廷吏の姿で襲いかかってきたに等しいものだったのだ。この事態に直面して、彼の自己防衛の攻撃性は暴走することになる。

第二幕は、父と娘の陰鬱な食事の場面から始まる。後で詳しく見るように、娘クララもまた母を亡くし、レオンハルトにすてられ、しかもひそかに妊娠しており、そうでなくとも追い詰められていた。しかしアントンは、敬虔な妻という大事な支えを失ったいま、おのれの地位を守る最後の砦として彼女を見ており、食べることもできない様子の彼女を気遣うかわりに、こんなふうに釘を指す。

おめえは、母さんとおんなじような女になれ。そうすりゃ世間も言うだろうさ、あの不良が道を踏み外したのは両親のせいじゃねえってな。だって娘の方はちゃんと真つ当に進んでるよ、しかも先頭切ってるよ、てな。（恐ろしいほど静かに）それに俺もできることはしてやるさ。真つ当な女の道が、ほかの娘たちよりや楽になるようになあ。

おまえまで、人さまから後ろ指をさされるようなことになりやなあ、俺はすぐさま——（首に手をやりながら）髭を剃ろう。それで誓っておくがな、俺というものをみんな剃り落としてやろう。そうすりやおまえはなんでも言えるさ、父さんなにかにびっくりしたんでしょ、ちょうど通りを馬が駆けてつて、とか、猫が椅子を倒しちゃつて、とか、ネズミが足に駆け上がったのよ、とかな。（355）

ここで彼は、万一のときには髭剃りをしくじったかのように死んでやると言っている。しかもそれはクララが説明に困らないための特別の配慮なのだと言う。当然クララは怯える。

クララ ああ、神様、あたしはどうしたら良いでしょう——

アントン なにもない、なにもないさ、おまえはいい子だ。俺はちょっときつく言いすぎてるな、そんな気がする。なんでもない、今のままでいておくれ、それで良いんだ！（356）

先に見た反語的な語り、つまり、自身の無力さや受動性を演出しておいて、これを自己防衛の攻撃に用いるというアントンに特徴的なやり方が、この場面では際立ったかたちであらわれている。アントンは自分の言葉に、娘に対する周到な配慮と一歩引いた自己放棄の姿勢を織り交ぜながら、これをそのまま脅迫の言葉とするのだ。ここでアントンは明らかに、他に配慮するケアのみぶりを他者への攻撃に転用している。

ここまでみた男性像からわかることをまとめておこう。ギリガンは、家父長的秩序のもとでは「人間関係のなかで生きる」姿勢が女性の、「自律的」で「理にかなった」ふるまいが男性のものとして想定されがちとする⁽¹⁶⁾。だが、右の

アントンとレオンハルトのやりとりにおいてこの違いは、性差よりもむしろ世代間の差としてあらわれていた。ここでは関係性からの自律に向かう後者が新しい世代のものであり、それは卑劣なレオンハルト像を通して、精神的自由とは無縁のたんなる利益追求主義として強調されていた。その一方で、ケアと響きあう姿勢の方も、まったく理想化の対象ではない。つながりに重きを置くアントンの思考回路はツンフト社会の相互扶助の枠組みに埋め込まれており、排他的な力学に刻印されたものとして描かれている。それでもこの枠組みの根底に、人が相互依存的な関係性のなかでしか生きられないことを受けとめる姿勢があることも否定できず、まさにそうした部分こそが、合理主義者レオンハルトの冷笑と苛立ちの対象になっていた。この作品では、そんな冷笑に象徴される「外部」の台頭に追い詰められて、「家父長的なケア領域」の父親が、この領域を決定的に裏切るさまが描かれている。相互扶助や排他を通して「生活」を、そして家長としての地位を維持していた彼は、排他的暴力を、まさにそれによってこそ維持してきたはずの「生活」に向け、しかも、「生活」をともにする一人として彼が必然的に共有していたケアの言葉を、脅迫のために転用する。それによって彼は、「家父長的なケア領域」を完全に空洞化させてしまうのである。

四 娘クララにみる規範としての配慮

四・一

こうして「家父長的なケア領域」を父親自らが空洞化させるとき、そこに住まう女性たちはどうなるのだろうか。『マリア・マグダレーネ』において、この領域を父親とともに支えていた母親は、破綻に先回りするようにして死んでしまっ

た。残されたのは、恋人にすてられ、母の支えを失い、しかもひそかに妊娠してしまったクララである。

彼女はどんな少女だろうか。劇の冒頭の描写からは、病み上がりの母親を氣遣い、家族を大事に思う、敬虔で心優しい少女の姿が浮かび上がっている。父親をうやまう気持ちも忘れない彼女は、親不孝者のカールとは対照的な存在なのだ。ただ、彼女にはひとつ顕著な特徴がある。それは、人のまなざしや言葉の裏に隠された意図を過剰に読み取ろうとすることである。他人のまなざしが彼女におよぼす支配力は、たとえばこんな言葉に明らかだ。

だってあたし、誰かがあたしをじっと見ていると、そのぶん顔のおできが大きくなるように思えてしまつて。(337)

先に見たように、彼女の恋人レオンハルトはどうしようもない卑劣漢だが、そんな男と付き合ってしまったことにも、他人の目を気にしすぎるといふ性質が関係していた。本当のところ彼女は、彼ではなく幼馴染の秘書の方が好きだった。この秘書は、恐怖劇にも似た暗さに覆われたこの作品の中でただ一人、一九世紀的な自由の理想主義的側面、つまり精神の自由や愛といったものを体現する明るい存在だ。結局はこの明るさもクララを救う力はずらず、余計な希望をちらつかせてかえつて現実の陰惨な闇を思い知らせるだけなのだが、それでも、彼が愛と善意の人だったことはたしかで、だからこそクララも彼に惹かれたのだろう。けれども、街を離れて大学に行った彼をクララは待つことができなかった。まわりの人たちが、あの子は見込みのない幼い恋を信じていると噂しており、それがどうしても気になったからである。周囲の噂や、母親の口出しにあらがうことができずに、彼女は言い寄ってきたレオンハルトと付き合った。レオンハルトと体の関係を持ったのも、愛や欲情や好奇心のためではない。彼にせまられたとき、腕づくでもなかったのになぜ逃げ出さなかったのか。それについて彼女はレオンハルトにこう語っている。

月が、それまであたしの味方をして忠実にあずまやのなかを照らしてくれていたのに、濡れた雲間に悲しげに沈み込んでしまった。あたしは行こうしたんだけど、なにかに引きとめられた気がして。はじめはあんたかと思った、でも薔薇の棘だった。まるで歯で噛み付くみたいに、服をしっかりと掴んでるの。あんたはあたしの心を薄情だつて責めてくるし、自分でも自分の心がもうわかんなくなつて。あんたはまるで借金を催促するみたいに立ちはだかつていて、あたしは——ああ神さま！（33）

月の光、薔薇の棘、言葉。あらゆるものから彼女は意味をくみ上げ、ありもしない自分の義務を導き出してしまふ。そして自分自身の欲求や思いを見失い、結局自分にとって致命的な道を自ら進んでしまふのである。

人の目を気にするクララの性質は、一方ではつながりを重んじる「家父長的なケア領域」のあり方に対応したものでろう。そこでは世間のまなざしこそが、つながりを、その背後にある排他構造とともに効果的に維持するのだ。だから父親アントンも世間体をひどく気にしていたが、クララの場合は人のまなざしへの受動性がさらに顕著である。それは彼女が「女性」であり、その母親と同じように、家庭内のケア役割を担うべく育てられてきたことと無関係ではないだろう。クララの像を通して描かれているのは、つながりを重んじ、関係性のための配慮にすべての意識を集中させるというケア役割に求められる姿勢が、当の本人にきわめてネガティブな結果をもたらすさまである。ケア領域の優等生である彼女は、まわりが求めているものを先回りしてくみとることに長けている。しかしだからこそ、いつも自分ではない誰かの意図に絡め取られてしまうのだ。彼女は人が噂をするからと好きな人を待つことをやめ、あらがってはならない気がして不本意な性関係を拒むことをやめ、そして父親のまわりくどい、遠回しの言葉から、自分がどうふるまわね

ばならないかを正確に悟る。人の欲するところによく配慮し、配慮に気を取られてしまうからこそ、彼女は自分で自分の首を絞めてゆき、自分自身に対して、お前は幸福になるための選択をしてはならない、生きのびるための選択をしてはならないと言いつけることになる。

重要なのは、その過程に一つの覚醒がともなっていることだろう。つまり配慮することが習性になり、条件反射のようにあらゆる言葉や事象に反応していた彼女が、父の衝撃的な宣言とそれに続く秘書との決別を通して、配慮の中心にすべきものをはっきりと認識するのだ。言い換えると彼女は、それまで無自覚に演じていた「家父長的なケア領域」の娘としての役割を、あらためて自覚的に引き受ける。それは「自分が何者であるか」ということについての一種の目覚めにほかならず、だからこそ彼女の言葉も、それまでの優等生的な殻を突き破り、力強さを獲得してさえているけれどもこの目覚めは、「生きない」という決断でもあった。第三幕に入ると、クララは幸せに生きることへの夢のすべてをかなぐり捨てて、もはや「蛇」(71)としか思えないレオンハルトに結婚を乞いに行く。

あたし一人だけのことだったら、——我慢もする、誰も惨めなあたしを助けてくれず、よってたかつて踏みつけにしても。なにかの罰としてじっと耐える、なんの罰だかわかんなくても。子どもも愛する、こんな奴の面影があつてもね。(…) だけどあたしは一人じゃない。(369)

ここではすでに選択肢が絞られている。彼女がその欲するところをくみとらねばならない相手というのは、結局のところ父親ただ一人なのだ。レオンハルトの卑劣さをあらためて思い知らされた痛ましい場面のあとで、彼女はいつそ気持ち楽になったと言う。この世の地獄をもう十分に見て、もはやなんの未練も残さずに選ぶべき道を進むことができる

からだ。クララの覚悟を知って焦ったレオンハルトは言う。「だがお前は自分を殺せば子どもを殺すことにもなるんだぞ。」(372)クララはこう返す。「どっちも父親殺しよりはましだから！」(372)この解答に、もはやなんの迷いはない。覚醒を経た彼女にとって、優先順位は明らかなのだ。

四、二

第三幕の後半では、誰もいない家に釈放されたカールが帰ってくる。

カールは父親にとつての問題児、母親の秘蔵っ子で、奔放にふるまい家族に心配をかける放蕩息子だ。つながりへの配慮になどまったくとられておらず、かといってレオンハルトのように競争原理を信奉しているわけでもない。家族も故郷も捨ててアメリカに旅立つことをもくろむこの若者が体現するのは、憂いなくケアの関係性から飛び出そうとする無鉄砲な冒険者だ。彼にとつて家族は心配性で口うるさく話を通じない存在だが、そのくせ彼は、自分が男性であるおかげで世話される側であることにはなんの疑問も持っていない。帰宅した時も、カールは当然のように女性からのケアを期待する。「クララはどこにいるんだか？ 腹もすいてりゃ喉もカラカラだ！ 今日日は木曜日だな、晩めしは子牛のスープだったはずだぞ。」(375)

そこに、先ほどレオンハルトと決裂したクララが帰宅する。

顔をあわせた二人は、ともに、生まれ育った「家父長的なケア領域」を去ろうと心に決めている点では同じだ。けれどもお互いあまりにも違う現実を見ているために、その会話はまったくかみあわない。かみあわないまま、ケアをする者、される者という役割だけが、空虚な約束事のように演じられる。カールはクララに葡萄酒を求め、クララは彼の給仕をする。クララはさらに、台所で父親の晩酌の酒を温める。

こうしてクララはケアするものとしての役割をこなしながら、一步一步死に近づいてゆく。彼女にとっては父の晩酌の準備が最後の仕事だったが、その意味に気づくと、突如として恐怖に襲われる。

台所の扉を閉めて、もう二度とここに入らないって思ったら、心底ゾツとした。そうやってこの部屋からも出るんだ、この家からも、そしてこの世からも！ (378)

取り乱した彼女は思わずカールを呼ぶが、彼には彼女の絶望は見えない。見ている現実も、見ている未来もすれちがったまま、ふたたび、ケアをする者、される者という役割だけが反復される。

クララ カール、おやすみ！

カール こんなに早く寝るのかい？ おやすみ！

クララ (主の祈りを復唱する子どものように) われらをゆるさせたまえ！

カール 寝る前にもうひとつ頼まれてくれ、水をいっぱい、それもくみたてのやつをな！

クララ (早口で) 井戸からくんできてあげよう！

カール そうか、いいようにしてくれ、まあ井戸もそれほど遠くねえからな。(378)

半ば放心状態だったクララだが、くみたての水を飲みたい、というカールの言葉に対する反応は早かった。その言葉が、彼女にとっては自殺に向けての最後のひと押しになったのである。

ありがたい、ありがたい！　これが最後の気がかりだった！　自殺なんかしたら、あたしの事情もすぐにバレてしまふ、でもこれで、みんなこう言うでしょうよ、事故だね、あの子は落っこちちゃったって！（379）

ここで彼女は、父親とまったく同じように「配慮」に満ちた死を目指している。ケアのみぶりを過剰に追求する、まさにことによって、彼女もまた「家父長的なケア領域」を自ら打ち壊しているといえるのかもしれない。いずれにしても、自分の死をあやしまれないようにという彼女の気配りは、結果的に無駄だった。彼女の身投げは近所の女中に目撃されていたのである。残された男性たちが呆然とし、最後まで自分の罪を理解できない父親が考え込んで幕となる。

先にふれたように、自分の利害を守ることにのみとられ、それによって他人が被る痛みに無感覚なあり方は、ヘッベルにとって、亀裂があらわになった時代の切実な問題だった。『マリア・マグダレーネ』においては、競争と合理主義の流れから取り残された「家父長的なケア領域」が、この問題を浮き彫りにするための格好の舞台とされている。自己の立場を守るために娘を追いつめる父親と、自分の立場をよく理解するがゆえにそれに抵抗できない娘の救いのない悲劇をおして明らかになっているのは、既存の枠組みからの「自由化」とともに剥き出しになる人間の不自由さであり、さらに、この不自由さの皺寄せがとりわけ「女性」に降りかかる構造だろう。目的のために余分なものを切り捨てるようなふるまいが幅をきかせて伝統的なケアの精神が周縁に追いやられ、家父長的な統率者がこの風潮と張り合うようにして自己防衛に振り切るとき、ケア領域に取り残された女性たちは、必然的に損な役回りを強いられる。なぜなら彼女たちは、自分自身ではなく、「家父長的なケア領域」を維持するための言葉しか持ち合わせていないからだ。クララは「配慮する者」という役割をつらぬきとし、まさにこの役割の完成として自らを殺すことになる。結局は彼女の

自殺こそが父親に対する破綻宣告になったことを考えると、「ケアのみぶりを攻撃に転用する」という、父親アントンに特徴的だったやり方を、彼女に認めることも可能ではあるだろう。ただ、彼女の場合それは彼女自身の生存戦略としては機能しえなかった。『マリヤ・マグダレーネ』は、「家父長的なケア領域」の破綻を描き、さらにこの破綻とともに、「女性」が自らの利害を主張する道を失うさまを克明に描き出している。

五 女性の疎外にまつわるふたつのエピソード

「家父長的なケア領域」に変容をもたらした社会の変化が、結果的にケアをになう女性の疎外につながりうるというという問題は、以下に見るように、劇の中盤にはさまれた商人ヴォルフラムの妻をめぐるエピソードとも関係しているだろう。

商人ヴォルフラムは、カールが盗んだとされた宝石の持ち主である。悲劇の引き金となったこの事件の真犯人は、ほかならぬヴォルフラム自身の妻だった。彼女はすでに、クララも含めて街のみならず頭のおかしな女だと思われていた。なぜなら彼女は、街で火事があったときに手を叩いて大喜びし、もつと燃えろと言わんばかりにはおを膨らまして息を吹きかけたからである。この妻について商人ヴォルフラムは悩ましげにこう語る。

あれも昔は誰よりも徳のある情け深い女だった、なのに意地悪で人の不幸を喜ぶようになってしまつてね。下女がグラスを割ったり、指を切ったり、目の前でそういう粗相があるとな、もう嬉しがつて嘔し立てるのさ。そんなこ

とは私もずいぶん前から知っていたんだがね。だがあれがうちのなかの物をどこかへ持っていったり、金を隠したり、書類を破いたりしていたとは。残念ながら気づくのが遅すぎた。(359)

彼女は娘の人形や下女のスリッパ、取引に使うノートや手紙など家中のものを脈絡なくくすねては、屋根裏の箱のなかに隠していたのだった。カールが盗んだと思われていた宝石もそこから見つかったのである。

ヴォルフラムの妻は、ケアする者の美德たる「情け深さ」を完全に放棄して、他人の不幸をことのほかに喜ぶ。ヴォルフラムがやり手の商人だという設定を考えると、この印象的な女性像を、経済的な成功がひそかに生み出す影とらえてもそれほど強引ではないだろう。狂気の彼女は、経済の自由化にともない拡大する競争社会の影、つまりそこでひそかに膨らむ、他人を蹴落として喜ぶような心性こそを、生き生きと演じてみせているのだ。狂気のふるまいを通して、彼女は、自分を影の側に追いやった世界それ自体に傷をつけ、これに復讐しているようでもある。ただ皮肉なことに、その影響を致命的なかたちで被るのは、夫ではなくもっと弱い者たちなのだ。

もうひとつ、ヘッベルの作品から、女性疎外の主題を示唆する部分を紹介しておこう。それは『マリア・マグダレーネ』ではなく、彼が初めて世に出した戯曲『ユードイット』のなかに見出せる。

ベトゥーリヤの街を救うために、敵将ホロフェルネスを誘惑して寝首をかけた旧約聖書外伝の女性を描いたこの作品においても、『マリア・マグダレーネ』と同じように、人間社会は相手を否定し抹消するような力がひそかにぶつかり合う、殺伐とした場所として描かれている。ただしこの闘争的なせめぎあいには、ここでは経済とは無関係だ。この作品においては、死んだ夫が残した意味ありげな言葉に呪縛され、寡婦でありながら処女という不可解な状況に置かれた女主人公ユードイットの姿を通して、「自分は何者か」という問いにさいなまれた者の不安と焦りが拡大して描かれる。

注目に値するのは、この疑心暗鬼に満ちた闘争的な世界において、最も忌み嫌われているのが「母親」だということである。やがてユーディットに殺されることになる武将ホロフェルネスは、不安そうなユーディットとは対照的な強者として登場する。人のまなざしなど意に介さず、お互いの意味を探り合う世知辛い闘争などを超越した、絶対的な高みに自らを位置付けている彼は、部下に対してこんなふう語る。

ホロフェルネス 俺は世界中の女を見たいと思うが、たった一人例外がある、その女を見たことはないし、これかもけつして見ないであろう！

士官 それは何者でございますか。

ホロフェルネス 俺の母親さ！ 自分の墓なぞ見たくもない、それと同じように母親など見たくないのだ。俺は俺の出自を知らんが、これほど嬉しいことはない。(…) いったい息子にとつて母親とはなんだ。かつて自分がそうだったところの、また老いてそうなるだろうところの無力さの鏡さ。息子は母親を見れば、乳を何滴か飲み込んでピチャピチャやってお返しした、惨めな餓鬼のころを思い出さずにはおられまい。その記憶がなくなる頃には、母親のうちに幽霊が見えてくる。そいつのせいで老いだの死だのに取り込まれ、おのれ自身の姿も、肉も血も厭わしくなつちまうのだ。(47)

ここで「母親」とは、人に依存せねば生きてはいけない無力な幼年期と老年期を映し出す鏡であり、ホロフェルネスが自身から切り離れた不自由さの全てを象徴する存在にほかならない。彼にとつて「母親」は、自らのひそかな依存性、つまり彼もまた人間である以上他との関係性のなかでこそ生きているという不都合な「不自由さ」を、身も蓋もなく暴

露する邪魔者なのだ。

筋が進むと、強さを誇ったホロフェルネスも、ユーディットの手によってあつけなく首を落とされる。その後街が解放されたことに民は歓喜し、長老たちは彼女にひれふして彼女になんでも望みの褒美を与えろと言うが、ユーディットはこう返す。「私が望んだときに、私を殺してください。」(75) 彼女は、ホロフェルネスの子どもをみごもってしまつたらどうしよう、と恐れていて、もしもそうなればすぐさま死のうと決めていたのだつた。自らを一方的に意味づけてくる力に不安をつのらせ、「虫けら」(90) にされたくない一心でホロフェルネスを殺した彼女の最後の恐れは、妊娠して「敵の子の母」という不可解な意味を押し付けられることだつた。「私はホロフェルネスの息子を産みたくない。もう孕まぬよう、神に祈っておくれ！ たぶん神もお恵みを下さるだろう！」(76)

このように『ユーディット』においては、すきを見れば他人から否定的な意味を貼り付けられてしまう不安に満ちた人間関係において、「母親」が、もつとも忌避される存在として浮かび上がっている。『マリア・マグダレーネ』も、市民悲劇に特徴的なモチーフのひとつだつた未婚の妊娠を描いており、妊娠して母親になることに致命的な意味が与えられている点は同じであつた。もちろん『マリア・マグダレーネ』の場合は、なによりも古い時代を引きずつたままの厳格な性規範が問題化されている。ただ、自律と強さを誇るホロフェルネスの「母親嫌い」を念頭におくと、この戯曲に描かれた事態、すなわち「家父長的なケア領域」が空洞化し、立場の弱い者を疎外する力ばかりが剥き出しになつた場所で、妊娠した少女が生きる道を失うという事態には、性道徳とはまた別の問題を読み込むこともできるように思われる。つまりヘッベルのテクストは、依存が弱みにしかならない闘争的な場において、「母親」ないし「母になること」がどのような意味をまとうことになるのかを、赤裸々に物語つてもいるのだ。一九世紀における産業社会の進行は、家庭領域の囲い込みと公私の分離をより明確にうながす。それとともに家庭は、公的な意味を削り取られる一方で、それ

自体独自の価値を持つ空間として演出され、ビーターマイヤーの風潮とともに魅力的な文化的内実を備えるようになってゆく。外界の荒波から憩うことのできる愛の空間としての家庭領域のイメージが膨らまされるとともに、そこでもめまめしく世話をする母親の像は、ひとつの幸福な理想形として、また男性社会を補完する価値を体现する存在として、女性自身の自意識形成をも枠づけてゆくことになる。ヘッベルの作品世界は、そうした風潮とともに覆い隠され、語られにくくなるもの、つまり、確立しつつある産業社会の本質的なケア嫌い、「母親」嫌いを容赦なく浮かび上がらせている点で、注目に値するのである。

六 ケア領域の家父長制からの解放

ただ、『マリア・マグダレーネ』では、「家父長的なケア領域」の破綻が父娘それぞれの側から描き出されており、家父長制とケアがともに手をたずさえて没落することが必然であるかのようにも見える。だが男女のヒエラルヒーや固定的な権威構造それ自体は、本来、ケアの営みと切り離せない運命共同体というわけでもないだろう。じじつギリガンが「ケアの倫理」として取り出そうとしたのは、ケアの領域で蓄積される、そうした構造にあらがうような論理にほかならなかった。ただ、ケア領域に働く力学を見極めるためには、彼女のように家父長的な規制をケアの外部からの圧力として際立たせるよりも、両者の分かちがたい絡み合いに注目した方が妥当ではないか、というのが本稿の立場だった。ヘッベルは、この絡み合いが顕著な「家父長的なケア領域」を出発点としつつ、新しい風潮に押されてこれが破綻するさまを描き出していた。それによってこの領域に埋め込まれている排他の力を炙り出し、同時に「自由化」社会の負の

側面をも問題化しているのだが、その一方で、家父長的権威もろともケアの論理も自滅させてしまうことによって、ケアする者の無力さを、運命論的に絶対化しているようにも見える。彼の時代において、男性中心的な権威構造から離れたケア領域というものを想像する余地は皆無だったのだろうか。

『マリヤ・マグダレーネ』は、あくまでも破綻を徹底的に突き詰めた悲劇であり、ケア領域が家父長制の「外部」で展開するような未来をそこに読み込むことはできない。しかしテクストを離れてその作者の人生に目を移すならば、そこには、本稿の関心から見てきわめて興味深く思われるエピソードが残されている。それは彼の伝記に登場する二人の女性、エリーゼ・レンジングとクリスティーネ・エングハウス Christine Enghaus (1817-1910) にまつわるものである。締めくくりにかえて、以下にそのあらましを紹介しておこう。

若い日のヘッベルを支えたエリーゼは、彼との破局から五年後の一八五一年に、彼に宛てた手紙でこう書いている。「私はいつも、与えることは受けとることよりもはるかに幸せだと感じてきました。⁽¹⁸⁾」実際ヘッベルとの経緯からおしはかると、彼女には、愛されるより多く愛してしまい、それで損をするようなところがあつたと思われる。すでに書いたように、この時代の女性としては高い教育を受けていたが、その経験をとくに目に見える成果に実らせることはなかった。ただ、教養を身につけた女性だからこそ、作家になる夢に邁進するヘッベルを理解し、支えようと思ったのかもしいれない。彼の詩作や評判には熱い関心を寄せていたようで、彼は新しい構想や作品を真っ先に彼女に知らせている。ヘッベルと内縁関係にあつた頃の彼女の手紙は残っていないが、後年の手紙を見ると、教育や社会情勢に興味を持っていたことや、長い文章を書くことが好きだったこともうかがえる。いずれにしても、若い日のヘッベルに過剰なほどの愛をそそいだこと以外には特別に目立ったところはなく、華やかな表舞台とは無縁の女性であつた。

そんな彼女は、ヘッベルと暮らして子どもをもうけるが、先に書いたとおりこの子どもマックスはヘッベルがパリに

いた一八四三年に貧困のなかで死んでしまう。この時エリーゼは二人目の子どもを身ごもっており、周囲からもエリーゼからも、ヘッベルは結婚への圧力をさまざまに受けることになった。彼もこのままではまずいとは考えたようだが、なかなかそういう気持ちにもなれず、一八四四年末の日記にこんなふうに書いている。

結婚できるだろうか、しなければならぬのだろうか。一步踏み出すことができるのか、踏み出さねばならぬのか、いずれにせよ不幸になるのに。そして君も！ 幸福にはならないのに。⁽¹⁹⁾

出会ったところから、エリーゼはヘッベルを献身的に支えていた。ヘッベルはエリーゼの自己犠牲や愛情に心から感謝しながらも、自分は同じようには応えられないと感じ、このことをエリーゼ本人にも繰り返し伝えている。それはひとつには、彼に経済力がなかったからだだった。「稼ぎ方を知らないという点で僕は君の赤ん坊とおんなじだ」⁽²⁰⁾。もうひとつ、おそらくより決定的だったのはエリーゼに対する気持ちである。自分は彼女を、結婚できるほどには愛してはいない。それが彼の気持ちであり、彼にしてみればそれはどうにもならないことだった。そんな悩みと苛立ちが、一八四五年の手紙ではこう吐露されている。

君はこれまでに存在した最高の女の一人だ、なのに僕はそれにふさわしく愛することができなくて、それがなによりもつらいのだ。君も全部わかっているはずだろう。わかっているとして、君自身や僕を疑ったりできる？ 僕たちはどちらも、自然の定めを変えることはできない。別の顔を持つことができないうと同じように、別の心を持つことはできないんだ。⁽²¹⁾

同年のヘッベルの日記にはこうある。「愛してもいないのに結婚せねばならない…愚行を理性的に行わねばならないようなものだ。」⁽²²⁾デンマーク王から得た旅行用の奨学金も終わりとつあった。ハンブルクに帰っても、多方面から結婚への圧力を受けるだけで、将来の見込みはまったくない。手紙には、帰ることへの拒否感がなかば高圧的に繰り返されるようになる。「ハンブルクは墓場のように怖い」⁽²³⁾とまで書かれた手紙を受けて、エリーゼはもう彼とは会えないのではないかと思ったようだ。それに対する返事はこうである。「最愛のエリーゼ、僕らの間にあるような絆がどうして失われよう！」⁽²⁴⁾しかし一八四五年一月、彼はウィーンを訪れてそのままそこに拠点を移し、結局エリーゼの待つハンブルクには戻らなかった。

一八四六年、彼はウィーンで出会ったクリスティーネ・エングハウスと結婚する。クリスティーネはブルク劇場の専属女優である。ヘッベルより四歳年下だが、すでに駆け出しではなく、名声も経済力も十分に備えていた。ウィーン到着の当初は物価の高さにおのき、暖房費を節約して風邪をひき、服も買えないありさまだったヘッベルが、⁽²⁵⁾彼女と結婚してはじめて安定した住居を得、先の見えない貧困から抜け出したのである。エリーゼは、生まれてきた二番目の子どもエルンスト Friedrich Ernst Hebel (1844-1847) と共にすてられてしまった。

クリスティーネはもともとと貧しい階層の生まれである。早くに父親をなくし、七歳の時からブラウンシュヴァイク宮廷劇場の子どもバレエ団で働いていた。しかし演技の才能があり、この才能を見出されて女優として活躍をはじめ。ブレーメンを経て、一八四〇年にはブルク劇場の女優となり、ウィーンの演劇界の重要な一角を担うことになる。⁽²⁶⁾エリーゼとはまったく違う人生を歩んできたわけだが、二人には、共にヘッベルと深い関係を持ったということのほかに、ひとつの共通点があった。それは二人とも未婚の母だったということである。エリーゼはヘッベルと結婚しないまま二

人の子をもうけたし、クリステイーネの方にも、ヘッベルと出会ったときにすでに一人子どもがいた。

『マリア・マグダレーネ』にも描かれているとおり、一九世紀における性規範の厳格さは今とは比べものにならない。けれども実際に生きた女性たちのエピソードにふれると、現実には決して規範どおりだったわけではなく、常にいろいろな愛のかたちがあり、規範におさまらない性の営み、また出産もあつたことがわかる。もちろん、規範におさまらない性の関係を結んだ場合、当事者にはさまざまな不利益がもたらされた。エリーゼも、公にパートナーとして認知されない不安定さを長いあいだ耐えなければならなかったし、ヘッベルも未婚のまま同棲したことで支援者ショッペらの非難的になった。自分としてはどうにもならないのに、周囲から結婚を当然のように求められること自体、彼にとつては大きな苦しみだったようだ。ただ彼はこの苦しみをそのままエリーゼにぶつけてもいたので、結局一番不利益をこうむったのはエリーゼということになるだろう。クリステイーネの方は、彼女自身に経済力があり、おなじ未婚の母でも状況は違っていたかもしれないが、それでも風当たりや強さから逃れられたわけではなかったのだろう。彼女はヘッベルの『マリア・マグダレーネ』を読んだとき、まさにこれは自分のことを描いていると大きく心を動かされたのだという。その直後に、ウィーンにやってきたヘッベル本人と知り合い、恋に落ちたのだった。

ヘッベルとクリステイーネの結婚によって、エリーゼは絶望的な状況におちいった。さらに追い討ちをかけるように、一八四七年、ヘッベルとの二人目の子どもエルンストが病気で亡くなる。ヘッベルはこの子どもには一度も会わないままだった。

ヘッベルからエリーゼの話聞いたクリステイーネは、彼女の不幸に大きく心を動かされたようである。エルンストの病を知ると、ウィーンに引き取る提案をし、さらにエリーゼも呼ばないと主張した。彼の日記には、その後まもなく子どもの死の知らせが届いたときに彼女がこう迫ったと書かれている。「彼女を——母親を、私たちのところに呼び

ましよう。すぐに呼びましよう！」⁽²⁹⁾彼女の行動は早かった。部屋を準備し、エリーゼのためのベッドをしつらえた。ヘッベルはそんな彼女について、「こんな女性が地上に二人というだろうか」と書いている。⁽³⁰⁾エリーゼはこの招きを受け入れ、ウィーンへのヘッベル宅に一年半ほど滞在する。エリーゼにとってウィーンでの生活は「つらいこともたくさんあった」⁽³¹⁾というが、やがて彼女はクリスティーネにたしかな友情を抱くようになる。エリーゼがハンプルクに帰るときに、クリスティーネは自分がヘッベルと出会う前に産んでいた息子カール Carl Engenhausen-Hebbel (1842-1895) をエリーゼに託した。エリーゼは彼を世話し、教育しながら一八五四年まで生きた。

ハンプルクに戻ってからのエリーゼは、クリスティーネに宛ててしばしば長い手紙を書き、自分や少年カールの近況を知らせている。特にカールの教育については詳しく熱心に綴られており、受けとった養育費に対するお礼や、教育のための支出のことなども書かれている。社会情勢や文化関係の話題もある。ヘッベルの新しい仕事やクリスティーネの舞台にも熱い関心を寄せている。末尾ではいつも愛情や感謝を惜しみなく吐露しており、遠く離れた女友達の無事と健康を願う気持ちを切々と書き綴っている。クリスティーネの誕生日を祝う一八五〇年の手紙から、一部を引用しておく。

誕生日に、心からの祝福を贈ります。私の祝福の気持ちも、その日に心のなかではあなたのそばにいたことも、こんなふうに書かなくてもあなたはわかってくれると思う。でも人間ってなにかしらの形や目に見えるものにする生き物ですよ。だから内面の生活を紙に刻み込まずにはいられないし、それに目を滑らせることで、より安心するのだと思います。(…) 私たちの関係がこれほど純粋なものになったのは、私がそこにいたこと、ウィーンに来るよう呼びかけてもらったことのおかげです。あの忘れたい街で、つらいこともたくさんあったけれど、あなた

と出会い経験したそのすべてがなかったら、決してこんなふうにはならなかった。今の私たちの関係は、本当に、とてもまれなものだと思います。⁽¹²⁾

クリスティーネからエリーゼに宛てた手紙は残っていない。あまり筆まめではなかったようだし、彼女の方によい思いがあったのかはわからない。ただ、彼女にとってもエリーゼが特別な存在であり続けたことはたしかだろう。ヘッベルは一八六三年に亡くなるが、その三六年後の一八九九年に、ハンブルクのエリーゼの墓地が都市計画のために撤去されることになった。この時まだ存命だったクリスティーネは、エリーゼを埋葬するための墓地を新たに購入し、かつて不思議な縁でつながっていたこの女友達に、安らかに眠るための場所を用意したのだった。

こうした女性たちの生の軌跡は、なにかの影響を歴史に残したわけではなく、むしろ歴史の支配的な流れをかわすようにして、これをかいくぐるようにしてひそやかに刻まれたものである。しかしだからこそ、そこにはそれぞれが紡いだ生の、どんな型にはめようもない紆余曲折の道のりが浮かび上がっていて興味深い。あえて本稿の文脈でこれを見るならば、彼女たちの交流には、家父長的なものから離れたケアの関係性を認めることができるように思われる。家父長制がなくともケアの論理が維持されるること。家父長的ものの「外部」で、つながりのためのふるまいや言葉を蓄積しうること。歴史をかいくぐるようにして残された二人の交友の痕跡からは、そうした可能性を読みとることができ
るのだ。

- (1) キャロル・ギリガン『もうひとつの声で——心理学の理論とケアの倫理』川本隆史、山辺恵理子、米典子訳、風行社、二〇二二年。（原著：Carol Gilligan: In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1982.）
- (2) 日本でも、ケアの思想が注目を集めるなかでギリガンのリバイバルが進んでいる。二〇二二年十月には『もうひとつの声で』の日本語版新訳が刊行された。また二〇二五年には稲盛財団による京都賞がギリガンに授与されている。
- (3) キャロル・ギリガン『抵抗への参加——フェミニストのケアの倫理』小西真理子、田中壮泰、小田切建太郎訳、晃洋書房、二〇二三年、二二三頁。（原著：Carol Gilligan: Joining the resistance, Cambridge, UK Malden, Massachusetts: Polity Press, 2011.）
- (4) 「家父長制」についてギリガンは以下の著書でより詳しく定義している。Carol Gilligan; Naomi Snider: Why does patriarchy persist? Cambridge: Polity Press, 2018. そこでは家父長制が男性優位の秩序構造であるとともに関係性への配慮を抑圧する枠組みであることがあらためて強調されている。なおこの本は、二〇一六年の大統領選挙におけるトランプ当選を受けて、なぜ人は父権的権威主義を選択するのかという問いを追求し、家父長的な権威構造に絡め取られる心理的メカニズムを探ったものである。
- (5) ギリガン二〇二三、四一頁。（Gilligan 2011, s. 33.）なおギリガンは、以下の著書で「ケアの倫理」がこのような「人間の本性」の抑圧への抵抗にはかならないことを今一度強調し、「ケアの倫理」を「人間の倫理」として打ち出している。Carol Gilligan: In a Human Voice. Cambridge: Polity Press, 2023.

- (6) トーマス・ニッパード『ドイツ史 1800-1866 (上)：市民世界と強力な国家』大内宏一訳、白水社、二〇二二年。(原著：Thomas Nipperdey: Deutsche Geschichte 1800-1866. Bürgerwelt und starker Staat. 2. Auflage. München: C. H. Beck, 2024.)
- (7) 同、五七頁。(Nipperdey 2024, S. 49.)
- (8) 同、五七頁。(Nipperdey 2024, S. 49.)
- (9) 同、二六八頁。(Nipperdey 2024, S. 217.)
- (10) ヘッベルの伝記については以下を参照。Hergen Thomsen: Friedrich Hebbel. Lebensbilder und Anekdoten. Husum 1998. また幼少期の暮らしや日々の出来事、さらにそれに対する彼の印象については、彼が一八三四年からつけていた日記から多くを知ることが出来る。Friedrich Hebbel: Tagebücher. Band 1. Text, Berlin, Boston: De Gruyter, 2017.
- (11) Friedrich Hebbel: An Heinrich Theodor Röscher. In: Werke. Bd. 1. München: Hanser, 1963, S. 387-389, hier S.387.
- (12) Ebd.
- (13) ニッパード『前掲書』二六七頁。(Nipperdey 2024, S. 216.)
- (14) Friedrich Hebbel: Maria Magdalene. Ein bürgerliches Trauerspiel in drei Akten. In: Werke, Bd. 1, a. a. O., S. 330-382. 引用時は括弧内に頁数のみを示す。
- (15) 以下を参照。阿部謹也『刑史の社会史 中世ヨーロッパの庶民生活』中公新書、一九七八年。
- (16) ギリガン二〇一三、三一頁。(Gilligan 2011, S. 25.)
- (17) Friedrich Hebbel: Judith. Eine Tragödie in fünf Akten. In: Werke, Bd. 1, a. a. O., S. 10-75. 引用時は括弧内に頁数のみを示す。
- (18) Von Elise Lensing. 14. April 1851. In: Briefwechsel 1829-1863. Historisch-kritische Ausgabe (Wesselburener Ausgabe) in 5 Bänden, Bd. 2 (1849-1853), bearbeitet und herausgegeben von Hermann Knebel. München: indicium, 1999, S. 270.

- (19) Tagebücher, a. a. O., S. 441.
- (20) An Elise Lensing. 30. März 1845. In: Briefwechsel 1829-1863, Historisch-kritische Ausgabe (Wesselburener Ausgabe) in 5 Bänden, Bd. 1 (1829-1848), Bearbeitet und herausgegeben von U. Henry Gerlach. München: indicium, 1999, S. 700.
- (21) Ebd., S. 699.
- (22) Tagebücher, a. a. O., S. 469.
- (23) An Elise Lensing. 30. März 1845. In: Briefwechsel, Bd. 1., a. a. O.
- (24) An Elise Lensing. 29. Mai-10. Juni 1845. In: Briefwechsel, Bd. 1., a. a. O., S. 704.
- (25) Vgl. An Elise Lensing. 9. November 1845. In: Briefwechsel, Bd. 1., a. a. O., S. 739.
- (26) Vgl. Friedrich Hebbel: Tagebücher. Neue historisch-kritische Ausgabe. Bd. 2. Kommentar und Apparat. Hrsg. von Monika Ritzer. Berlin: Boston: De Gruyter 2017, S. 170.
- (27) 手紙や参照: An Elise Lensing. 30. März 1845. Briefwechsel, Bd. 1., a. a. O., S. 698.
- (28) An Elise Lensing. 1. Mai 1847. Briefwechsel, Bd. 1., a. a. O., S. 897.
- (29) Tagebücher, Bd. 1., a. a. O., S. 560.
- (30) Ebd.
- (31) Elise Lensing: Briefe an Friedrich und Christine Hebbel. Hrsg. im Auftrag des Hebbel-Museums in Wesselburen von Rudolf Kar-del. M. 4 Abb. auf Tafeln u. 2 Brieffaksimiles. Berlin, Leipzig: B. Behrs, 1928, S. 60.
- (32) Ebd.

* 本研究は、科学研究費補助金 (24K03772) の助成を受けたものである。

「家父長的なケア領域」とその「外部」